

## おばけは生まれ変わることができるか？

### —植民地主義をめぐる基礎的考察III—

池田 緑\*

#### 要 約

植民地主義の分析において、最も重要な要素は“主体”である。“マジョリティ”と呼ばれる人びとは、しばしばこの“主体”への意識が欠落している。同時に、欠落していることが“マジョリティ”であることを可能にしているのだ。このような“マジョリティ”は無責任で、無根拠で、応答責任性を拒否する“空虚な主体”として存在しており、あたかも精神的な“おばけ”のような存在である。このような主体性の欠落は、想像力の貧困さに起因している。“マジョリティ”とは、想像力を奪われた存在でもある。

このような“マジョリティ”は、抑圧関係における支配者と被支配者という、二項対立を隠蔽することによって維持される。支配者の多様性と被支配者の多様性が強調されることは、その両者の間に存在する権力関係を不明確にし、その結果として支配関係は維持される。支配関係を脱構築するためには、なによりも二項対立を分析の対象にしなければならない。

また“空虚な主体”は、容易にネーションや共同体に同一化する“危険な主体”へと変容する可能性がある。それは人気TVドラマ『北の国から』における、近代家族から共同体へと、パトリオティズムを経由して変化する登場人物たちの主体性をモデルとして考えることが可能であろう。

植民地主義と主体を考えるには、“マジョリティ”の想像力と応答責任性の欠落を問題としなくてはならない。“空虚”でも“危険”でもない、新しい応答主体の可能性を探るためには、この点が重要である。

#### 1. 主体にむけて

私は、「心的傾向としての植民地主義—植民地主義をめぐる基礎的考察I—」（池田，2005a）と「平等，寛容，想像力，そして植民地主義—植民地主義をめぐる基礎的考察II—」（池田，2005

b) において、植民地主義という概念をさまざまな抑圧関係の分析に用いるための基礎的な考察を行ってきた。本稿はそれらに続くものである。

植民地主義を考える際において最も重要な点は、誰が、誰に対し、いつ、どのような支配を行うのか、という点である。そのためには、支配と

\*大妻女子大学 社会情報学部

植民地主義を实践する主体を特定することが最初に必要となる。しかしそのような関係性は、単に支配者-被支配者という固定的なものであるとはかぎらず、また不変的なものともかぎらず、一人の個人のなかに支配と被支配が同時に存在する可能性も論じられてきた。

主体をめぐる問題は、植民地主義を考えるときの焦点である。「誰が」という問いかけがどのような関係性のなかで発せられるのか、その特定を行う主体は誰か?というメタレベルの問いかけも含めて、議論が百出している領域でもある。日本国内でも近いところでは、戦争責任を軸にして、加藤典洋や高橋哲哉らを中心に、上野千鶴子、徐京植、岡真理ら多数の論客を巻き込んだ「歴史主体(／認識)論争」が記憶に新しい。それらの論争は歴史をめぐる責任と主体性を中心に行われてきた。

私は、「基礎的考察Ⅰ」ならびに「基礎的考察Ⅱ」を踏まえて、次の課題としてこの主体という問題を考えたいと思う。それは植民地主義を多くの人々が問題化し議論するために必要な核心部分であると思われるからだ。しかしこの論争的なテーマに直接的に取り組む前に、その議論のためにはいくつかの準備的な議論が必要であると思われる。それは、主体という問題を植民地主義の観点から捉えるときに、その焦点をぼやけさせてしまったり、あるいはすりかえる効果のある言説がいくつか存在し、そのために意識的であれ、無意識的であれ、今までに行われてきた議論がかみ合ってこなかったり、議論の土俵そのものがうまく形成されてこなかったのではないか、という認識があるからだ。

本稿では、植民地主義の实践者が自らの植民地主義を終わらせるために、主体のあり方そのものを議論することを目的(次の課題)とし、その前段階として、確認をしておかなければならない「主体」をめぐるいくつかの論点について考えたい。本稿の目的は、主体のあり方そのものを議論することではなく、そのための準備であり、前駆的議論である。それは主体の空虚さにかんするものと、その政治的活用形態である反二項対立論、

そして主体性のナショナルな文脈への回収プロジェクトについて、などである。主体のあり方そのものについての議論は、次の段階で行いたい。

## 2. おばけ?

かつて、沖縄関係の集まりで次のような経験をしたことがある。その集まりは泊り込みを基本として、大まかなテーマだけを設定して自由に意見を交換するというものであった。夜も更けて、家が近所の者は帰宅し、あるいは体力の限界に達した者や酔った者はゴロ寝し(当然夜の部ではアルコールも入った)、気がつくと、宿舎の部屋で語っている者のなかで、“日本人マジョリティ”は私一人という状況であった。酒も入っていたことでもあり、議論に熱中していたため気がつかなかったのだが、ふとトイレから戻って部屋を眺めて気がついたのだ。

相変わらず議論は盛りあがっており、沖縄人同士が日本人の支配をどう克服するかについて語り合っている。そこに覚醒した日本人は私一人だ(その場に日本人は私以外にもう一人いたのだが酔いつぶれて寝息を立てていた)。私は急に身の置き場がなくなったような困惑した感覚に陥った。彼ら／彼女らは、私という個人を信用して、日本人である私の前でそのような議論をしていたのかもしれない。あるいは、私などの存在はもともと気になってなどいなかったのかもしれない。あるいは、私の存在感の軽重などよりもそこで行っている議論に重きをおき、熱中していたのかもしれない。いずれにしろ、私はそのとき、かつてジャン＝ポール・サルトルがフランツ・ファノンの『地に呪われた者』に寄せた序文に描いた情景を思い出した。

ヨーロッパの人びとよ、この本を開きたまえ。そのなかに入ってゆきたまえ。暗闇を数歩あゆめば、見知らぬ人びとが火を囲んで集うさまが見えるだろう。近づいて耳を傾けたまえ。彼らは、君たちの商社を、商社を護る傭兵を、どう処分すべきかと議論している。

たぶん彼らは君たちの姿を眼に止めよう。だが声も低めもせず、彼ら同士の話をつづけるだろう。この無関心さが心に突きささる。彼らの父親たちは、影の人間であり、君たちの被造物であり、死せる魂だった。君たちは光を分け与えてやった。彼らは君たちに向かってしか語らなかつた。そして君たちは、こんな幽霊どもに答えもしなかつた。だが息子たちは君らの存在に気がつかない。一つの火が彼らを照らし出し、彼らの身体を温めている。が、それは君たちの火ではない。君たちは遠くのほうから、自分が人目を忍ぶ夜の人間で、凍えた身体をしていることを感ずるだろう。銘々の順番がある。別の曙光が今や現れんとするこの暗闇では、幽霊とは君たちのことだ。(Fanon, 1966=1996:12)

もちろん彼らは、サルトルが描写するような物騒な相談をしていたわけでもないし、トイレから戻った私を暖かく議論の輪に再び迎えてくれた。しかし、そのとき私は、自分が明らかに場違いな存在であるように感じ、自分の体温の冷たさに“ヒヤっと”した感覚を覚えた。実際にはいい気分ですら酔っ払っていて生理学的な体温は高めであつたらうにもかかわらずである。自分が何かとても恥ずかしい存在で、そこにいるのが申し訳なくて、そのまま消えいりたいような衝動に駆られた。サルトルが描くように、あたかもそれは自分を幽霊のように感じ、その場の床に立っていることが不釣り合いであるような感覚であつた。私は自分の幽霊のような“体温の低さ”に“ヒヤっと”したのである。

そしてこの場違いと感じて消えいりたくなくなる感覚は、“マイノリティ”とされる人々が“マジョリティ”によって構成される社会のなかで今までにさんざん味わってきた感覚に違いないのだ。ちなみに、その場にいた人たちの名誉のために記しておく、彼ら／彼女らの態度には私を疎外するような素振りとはまったくみられなかつたし、ひきつづき議論の相手として暖かく、そして真摯に受け入れてくれていた。トイレから戻った後も引き

続き私は議論を続けたし、その後も現在に至るまで長い付き合いが続いている。ここで問題としているのは、あくまでもその状況における“私”の側の感受性である。私がなぜ自分を幽霊と感じたのか。その答は今も明確には出ていない。同時に私は“ヒヤっと”しながらも、彼ら／彼女らの話していることには十分に納得していたのであつた。むしろ共感すらしていた。しかし共感しながらも、同時に“ヒヤっと”した感覚を体験したことが、その後においていろいろと考える際の基点の一つになっていることは間違いない。

上野千鶴子は、9.11の報道に接して「やった！」と喝采を叫んだ日本の知識人がいたことを記している(上野, 2006:83)。思想的立場において、アメリカと“テロリスト”と呼ばれる人々を比べて、“テロリスト”により大きな共感を寄せている人がいることはよくわかる。あるいは“テロリスト”の“暴力”が、日本を覆うアメリカの覇権主義に風穴を空けたように感じた人もいるかもしれない。しかし、それにしても「やった！」は、あまりに無邪気すぎる態度ではないかと思うのだ。“弱者”である“テロリスト”に思想的な共感を覚えるのはよい。しかし「やった！」と叫んだ人は、自分が“テロリスト”とともに喜びをわかち合える側にいると考えていたのだろうか。

9.11では日本の銀行マンが何人も亡くなつた。そのうちの一人は、私と年齢もさほど離れておらず同じ大学の出身であつた。大学4年生の途中まで就職活動をしていた私は、“彼”と同じ企業も受けていた。私は就職活動の途中で大学院進学に進路を変更したが、なにかの拍子でその企業に採用され、これまたなにかの拍子でニューヨーク勤務になっていたら、死んでいたのは“彼”ではなく、私であつたかもしれない。アメリカ追従政策をとる国の大銀行に入行し、アメリカ経済の象徴的な場であるWTC内の支店に勤務しているということは、“テロリスト”からみれば明らかに攻撃されるべき者であろう。かつて私と“彼”は紙一重の場所にいたのかもしれない、現在も紙一重なのかもしれない。私は、攻撃される側にいる

可能性が高いのだ。そのことを思うたび、思想的に共感があろうとも、「やった!」という叫びは、あまりにも自分の位置に無頓着な叫びに思えるのだ。

また、世の中には被抑圧者に対して解放を説き、人々の心を燃えたぎらせるような温度の高い一群の書物がある。それらの本は古典ともいべきもので、多くの被抑圧者に読まれ、希望を与えてきた。たとえば先に紹介したフランツ・ファノンの著作 (Fanon, 1966=1996; 1951=1998など) や、マルコム X の自伝やスピーチ集 (X, Malcolm, 1965=1993; 1965=1968; 1970=1993など)、エルネスト・チェ・ゲバラの『ゲリラ戦争』 (Guevara, 1956=2002)、ストークリー・カーマイケル (カーマイケル他, 1968など) やヒューイ・ニュートン (Newton, 1973=1975)、ジェームズ・ボールドウィン (Baldwin, 1961/1963=1968など) といった人々の著作である。

これらの書物を日本人が読むことは非常に重要である。自分が世界のなかのどこにいるのか、明確に教えてくれるからである。しかし日本人男性のなかに、これらの書物から「解放されるべき人々」と同じように勇気をえて興奮する人がいる。そのような (興奮した) 語りを聞くたびに、私はつねに違和感を覚えてきた。われわれがこれらの書物から、「ダイレクト (=解放されるべく支配者と闘争を行っている人々と同じ意味において)」に勇気をえて興奮するのは、筋違いなのではないだろうか。

これらの書物は、基本的には抑圧に苦しみその抑圧から解放されるために戦う人々に向けて書かれたものである。先に引用した『地に呪われた者』の序文で「彼 (ファノン) の書物—他の人々にとっては燃えるように熱いこの書物—も、君たち (ヨーロッパ人) に対しては冷え切っている」とサルトルが述べている通りであるのに。

(Fanon, 1966=1996: 8-9, ( ) 内は筆者による補足)。日本人は日本にいるかぎり、少なくとも民族単位で抑圧はされていない (もちろん個人的な関係において抑圧関係はあるだろうが)。

これらの書物から“ダイレクト”に勇気と戦略と興奮をえられるのは、日本国内に居住する“マイノリティ”か、日本人男性に対峙する時の女性か、あるいは“性的マイノリティ”として括られて不平等な扱いを受けている人々などだろう。いずれにしろ、日本人男性で、“健常者 (いやな言葉だが)” で、ヘテロセクシュアルで、しかも大学に職を得ているか、これから得ようとする立場にいる者が、“ダイレクト”に勇気や興奮をえることには、違和感を覚える。いったい、あんたは誰なんだ、と。われわれ日本人 (とくに男性) が集団としてこれらの書物から“ダイレクト”に勇気をえることがあつたら、それはアメリカ追従政策を放棄し、アメリカと対抗的に歩んでゆく道を選び、その過程でアメリカの強大な力と対峙しなくてはならなくなった時くらいのものなのだ。もちろん、私も含めて日本人“マジョリティ”がこれらの書物から学ぶべき点は多いし、最終的に勇気も与えられるだろう。しかしその勇気とは、被抑圧者が解放に向かって抱く勇気とは異なり、自分たちの抑圧性を自ら解除し、新たな世界への扉を開くための知恵をえたことによる勇気や興奮でなければおかし<sup>1</sup>。

私自身の問題を考えたい。今の日本社会で、日本人の男性で、“健常者”で“ヘテロセクシュアル”で、大学教員であるということは、どのような存在であろうか。主流エスニシティに属し、性差別関係においては利益の享受者、“障害者”をカテゴリー化する抑圧者、ヘテロセクシズム (異性愛的性差別主義) の実践に組み込まれている者、そして周縁労働化を免れている者である。もちろんこれらは私のごく一部を表したに過ぎず、私の存在はこれらの項目のみに還元されるものではない。しかし、ここに挙げた項目に当てはまらない人々からは、抑圧者として名指しされるポジションナリティを有している。そして日本社会において、勝手気ままに生きることが許されてきた“マジョリティ度”はかなり高いといえるだろう。

鄭暎恵は、インタビューのなかで「マジョリティ」とは自分自身が見えていない「世界/自己

喪失者たち」だと述べる。そのため、世界を見るために「マイノリティ」を鏡として必要とし、自分の「マジョリティ」性を確保するために「マイノリティ」を再生産し続けると指摘する（岩淵・多田・田仲編，2004：158-159）。そのうえで、「マジョリティ」がもつ「考えなくても済む」状態は特権でもあり、裏を返せば最も奪われている状態だとも指摘する（岩淵・多田・田仲編，2004：160）。「マジョリティ」に苦しめられてきたであろう鄭は、さすがに“マジョリティ”をよく観察しており、定義も的確である。おそらく“マジョリティ”という精神的“おばけ”たちを多くみてきた彼女は、ふらふらとしてすーっとすぐに消えてしまう“マジョリティ”の無責任な心性を、苛立ちと不思議さと後味の悪さとともに眺めてきたのかもしれない。

しかし正直なところ、鄭のこの定義に接するとややむずがゆい感じもする。“マジョリティ”は最も奪われているかもしれないが、奪われることによって死ぬこともなかったのだから。むしろ“マジョリティ”は奪うことで他者を殺してきた。奪われることは奪うことの裏返しでもあり、その「奪われる」という状態の帰結は不平等であった。しかし他方で、鄭の指摘する「奪われた状態」は、私の日常でもあり、リアルな状況でもある。ことにその「奪われ方」は想像力において甚だしい<sup>2</sup>。つい最近も、自分の想像力が奪われていることを再認識した。今後考えるべき「主体」とも関連するので書き留めておくことにする。

上野千鶴子の近著『生き延びるための思想』（上野，2006）は、彼女のここ数年の思索の集成であり、多くの問題を提起するものであった。上野は、公的領域（戦場）と私的領域（家族）における暴力の一貫性を市民という概念を用いて説明し、そこに女性がどのようにかかわるべきかを論じた（上野，2006：26；121）。とくに対抗暴力に女性が参加すべきかをめぐる議論は示唆に富んでいる。上野は、対抗暴力とはそれを行使可能な者だけに許されるもので、暴力とは最終的には強者の論理であり、無力な者からの思想を立ち上げた

いと論じる（上野，2006：85）<sup>3</sup>。上野は暴力による被害者もその暴力に甘んじていることによって他者への加害者となる可能性を指摘し、女性にとって必要な市民権は差別者（男性）に似ることではなく、市民権の脱男性化であり、フェミニズムは弱者が弱者のままで尊重されることを求める思想であるべきだと論じる（上野，2006：vii；34；113）<sup>4</sup>。

これらの知見は上野の体験に基づいた見解であり、傾聴に値しよう。しかし上野が提起するこれらの問題は主体をめぐる問題の核心に触れるものであるため、ここではこれ以上深入りした議論をせず、稿を改めて論じたい。本稿で問題化するのには、この本を読んだ私である。

これらの上野の議論を目にしたとき、私が最初に考えたことは、このような議論が、男性にとって一種の免罪符として機能してしまわないかという点と、このような議論が結果的に弱者の力と機会を奪うのではないかという懸念であった。

最初の点にかんして言えば、男が恐れているのは「女が本気で過去の清算を求めてくること」である。男は自分が女に振るってきた暴力をよく知っているので、「やられたらやりかえ」されることを一番恐れている。たとえ不平等を解消することには賛成しても、近代以降にかぎっても、過去140年の負債を一気に自分が現在において払わされるのではないかと恐れているのだ。今日これからの平等にかんしてはひょっとしたら賛同できるかもしれないが（そういう差別者も少ないとは思いますが）、過去の負債をも支払う形での対等性など、まっぴらごめんなのだ<sup>5</sup>。なぜ親父のツケまで自分が支払わなければならないのか。差別者は、代々続いた支配関係が猛烈な反動の下に覆される歴史をみてきた。下手をすると代々の怨みを一気に解放され、最悪の場合は殺されるという形で支払わなければならないのではないかと（植民地暴動などがこの典型である）。これが、差別者が恐れる最悪のシナリオである。それに対して、被抑圧者による対抗暴力の否定はこの恐れを緩和してくれる。アメリカの白人たちがマルコムXを暴力主義者として蛇蝎のごとく嫌う一方で、キン

グ牧師を好んで記念日まで作って讃えた理由はここにある<sup>6</sup>。もちろん上野にしてみれば、差別者を免罪する気などまったくないだろう。この問題は上野の責任ではなく、そこに勝手に過去の権力行使の清算にかんする免罪の可能性を読み込む抑圧者側の問題である。

2つ目は、上野自身も言及しているように、弱者による対抗暴力に反対することは、抵抗者を「非力化（武装解除）」するものとして理解されることがあるという点である（上野、2006：84-85）。すなわち抑圧的な暴力に対抗する力を奪うことへの危惧と批判である。上野はヒロイズムという用語を使ってこのような見解に反論しているが、先にも述べたように、その詳細は主体にかんする核心的な議論となるため、他稿に譲りたい。

問題は、これらの2つの点を介して、私が上野の言説に被抑圧者の対抗の可能性の否定を読みとったことである。つまり、上野の言説は被抑圧者の対抗を無力化し、抑圧者に安易な免罪符を与えるモデル・マイノリティ言説ではないのかと感じながら読み進めていたのである。しかし、まもなくそれは私の誤読であることに気がついた。上野はあくまでも「対抗暴力」を否定しているのであって「対抗力」そのものを否定しているわけではない。「対抗力」を否定する言葉など彼女は一字も書いていないにもかかわらず、「対抗暴力」を否定することは、すなわち全面的に「対抗力」を否定することだと一人合点して誤読していたのだ。

なにゆえ私は「対抗暴力」を「対抗力」と読み違えてしまったのだろうか。もちろん私の読解力不足という主要因はあるにせよ、上野自身が「非力化」と読み込まれる可能性に言及しているように、私が犯した誤読にはより構造的な問題があると考えられる。それは、「マジョリティ」である自分自身が、「マジョリティ」の暴力の行使をよく知っているがゆえに、被抑圧者との関係において暴力を真っ先に想定しまうという条件反射にも似た思考回路をもっていること（そのような思考回路しかもっていないこと）と関係していると思われる。それが物理的なものであれ、言説上のもの

であれ、経済的なものであれ、「マジョリティ」が行使する「支配力」とは暴力的なものであり、広義の「支配暴力」に過ぎないことをよく知っているがために、そのような力に抵抗する「対抗力」もまた自動的に「対抗暴力」になるものと当然のこととして想定していたのである。自分たち「マジョリティ」が暴力（広義の意味で）を中心に支配を行っているために、それ以外の形での「対抗」があることへの想像力を欠いていたのである<sup>7</sup>。

このような想像力の不足についての経験は、鄭暎恵が指摘した「奪われた状態」を自覚させるものであった。「マジョリティ」とは想像力を働かせる必要のない、想像力を働かせなくとも生きていける、したがって想像力を欠如させた、もっとも主体的ではない人々なのだ。「マジョリティ」にとっては、なにごととも「ひとごと」である。野村浩也が指摘するように、このような想像力の欠如がもたらす「鈍感さ／愚鈍さ」こそ「マジョリティ」の特権であり（野村、2005：122-123）、権力の源泉であり、同時に個人的には最大の欠落である。自分の存在への責任を問われることもなく、ふわふわと漂って、その時々被抑圧者を食い物にし、力を振るい、また無責任にふわふわと去ってゆく、精神論的な「おばけ」。しかしその「おばけ」は他者を襲い、ゾンビのように生きる力を奪う、たちの悪いおばけである。したがって、「マジョリティ」が、生を実感して生きようと望むなら、「考え、想像すること」を取り戻さなくてはならない。そのためには、自らの恵まれた位置の無根拠性と、世の中へのかかわりの希薄さという体温の低さ（その実利益だけは受け取っているが）を実感させる、「ヒヤっと」した感覚に、つねに意識的であることが必要なのだ。

### 3. 美しいおばけ？

とはいえ、このような感覚を維持し続けることには、ある種の困難が伴う。千田有紀は、自己のポジショナリティを問うことにより、自己の責任が免責される誘惑を指摘する。千田が問題とする

のは、自分の加害者性を指摘することは苦痛であると同時に快楽であり、自己のポジショナリティを明示的に示すことにより、自分は同一のカテゴリーのなかでも「他の無自覚な仲間とは違う、自覚的なよい人間」になれる、という欺瞞についてである（千田，2005：284）。

この千田の指摘は示唆に富んでいる。じつのところ、差別者が反差別を唱えることは、彼ら／彼女らにとって損ではない。たとえば男性が女性差別に反対することは、その男性にとって、ほとんどの場合損害をもたらさない。彼は正義感と寛容さに満ちた人格として女性からも歓迎され、また他の男性に対して「正義の政治」を実践することが可能であり、そのような政治において「頑迷な差別主義者」である他の男性より有利な立場に立つことすら可能である<sup>8</sup>。しかもその間にも差別によってえられる構造的な利益はしっかりと享受し続けることができる。さらにそのような自分を他の“汚い差別者”とは異なる“美しい存在”であると思ひこみ、また主張することすら可能になる。差別構造が変わらないという確信が強ければ強いほど、反差別を訴えることは、訴える抑圧者にさらなる利益をもたらす<sup>9</sup>。

そのような“美しい差別者”にとって、被差別者は美しいほどよい。自分以外の“汚い差別者”によって抑圧されている無垢で美しい存在。被差別者が美しければ、その美しさに価値を見出す自分に酔い、被差別者の美しさに自分を重ねて、“汚い差別者”との差異化も可能になる。男性が女性に平和を表象させたり、“マジョリティ”が“マイノリティ”の文化を讃えたり、“マジョリティ”が先住民族に自然との共生や環境思想を表象させたがるのは、この効果が期待できるからである。被差別者の美しさは“美しい差別者”の美の源泉でもある。“美しさ”を政治的資源に動員している点で、ある意味では“汚い差別者”よりも狡猾である。

しかし、“美しい差別者”が望むように、つねに被差別者が美しいとはかぎらない。マルコム X が自伝の中で回顧しているように、むしろ被差別者はその貧しさゆえに互いを憎み傷つけあい、尊

厳を失ってゆく（X, Malcolm, 1965=1993）。しかし、たとえ被差別者が美しくなくとも大丈夫だ。“汚い差別者”は、被差別者が美しくないことを理由に自らの差別行為を正当化できるし<sup>10</sup>、一方で“美しい差別者”も“汚い差別者”による“汚い差別”の結果としての“汚い被差別者”をもちだして、その責任を追及することによって“汚い差別者”より優位に立てるのだ。被抑圧者は美しくても、醜くとも、どちらにしても差別者の利益に貢献する。

#### 4. 幽体離脱？

このような差別構造においては、差別する者とされる者の断絶は決定的である。これは“マジョリティ”と“マイノリティ”の断絶と言い換えてもよい。もちろん、誰が“マジョリティ”で誰が“マイノリティ”であるかは、その差別関係において個別的に考えられるべきである。たとえば、日本人女性は日本人男性に対しては“マイノリティ”であるが、数ある民族差別においては“マジョリティ”である。“同性愛者の男性”は、“異性愛者の男性”に対しては“マイノリティ”であるが、女性に対しては社会資源の分配においては“マジョリティ”であると同時に、セクシュアリティがかかわる文脈においては“マイノリティ”でありうる。鄭暎恵の「誰しも、ある意味で「マジョリティ」であり、別の意味では「マイノリティ」でもあるという複合性を持っているはず」という指摘は正しい（岩淵・多田・田仲編，2004：159）。しかしながら、個別の権力関係・差別関係・抑圧関係においては、差別する者とされる者は断絶している。したがって、自己が“マイノリティ”になる可能性を想像することによって、“マジョリティ”となる局面における自己の差別性を想像することは、きわめて重要である。

しかしそのような作業は慎重に行われなければならない。たしかに、ある特定の差別関係（A）において“マイノリティ”になるかもしれないと想像することによって、別の差別関係（B）にお

いて、“マジョリティ”である自分の権力性・差別性を自覚することは重要な作業である。しかし、差別関係 (A) で“マイノリティ”でありうることは、別の差別関係 (B) で“マジョリティ”であることを解除しないことを、決して忘れるべきではない。ある関係で“マイノリティ”であっても、別の関係で“マジョリティ”として差別の実践者であることは、十分に両立することである。ある特定の個人が、すべての社会関係において“マジョリティ”や“マイノリティ”であるということは、ありえないだろう。しかし同時に、特定の関係においては“マジョリティ”や“マイノリティ”であり続けることも確かなのだ。これは、植民地主義における「主体」を考える際の焦点の一つであると思われる。

植民地主義研究において、しばしば問題となる二項対立をめぐる議論は、この点と深くかかわっている。この二項対立をめぐる論点については、今までいろいろな所で触れてきたが<sup>1)</sup>、植民地主義における二項対立否定論のもつ政治的効果に論点を絞って論じたことはなかったし、主体の問題を考えると避けては通れない論点であるため、過去の拙稿との重複もあるが改めてまとめてみたい。

“マジョリティ”と“マイノリティ”を、あるいは“差別者”と“被差別者”とを峻別する議論は、現在きわめて評判が悪いようだ。「二項対立を超える」必要性が説かれ、“マジョリティ”と“マイノリティ”双方の多様性を強調する言説があふれている。その背景にはカルチュラル・スタディーズの盛隆により、一枚岩的な集団が存在しえないという視点が一般化したことも関係しているだろう。現在、二項対立にこだわることは、多様性を無視した思考停止として批判の対象になりうる。

たしかに、日本国籍を持つ人々には恩給などが支払われ、国籍のない人々がそこから排除されてきた。しかしそれは「日本国籍を持つ人間」のなかでも、軍人をはじめとする、政府から認定された人間に支払われたにすぎ

ない。被爆者援護法は長年の運動でようやく実現したにすぎず、空襲や沖縄戦など被災者には補償はなかった。

すなわち日本政府が支出をしてきた対象は「日本国籍を持つ公務従事者」が中心だったといえる。それはせんじ詰めていえば、「公務」というかたちで日本政府に貢献し、かつこれからも貢献が期待できる（日本国籍がある）人間にだけ支払った、ということである。しかもその金額は一般軍人よりも高級軍人に多額だったように、政府に対する貢献度や、政府部内での地位の高さに応じている。

— (中略) —

なぜこんなことを問題にするのかといえば、「被害者=アジア」「加害者=日本人」という二項対立的な議論に、限界を感じるからである。この図式のなかでは、日本国籍を持つ人間にできることは、責任を感じて恥じ入るか、同情するかしかない。さもなければ「自分には関係ない」として議論を避けるか、「日本は悪くなかった」と歴史修正主義に走るか、ということになる。私は、自由主義史観をはじめとした右派ポピュリズムの温床は、こうした二項対立的な枠組みだと思っている。

「被害者」と「加害者」、あるいは「マジョリティー」と「マイノリティー」といったものは、国籍や民族といった基準で、実体的に区分できるものでは必ずしもない。国家が決めた線引きの外側に位置づけられれば「マイノリティー」として排除される可能性は「日系日本人」にもありうるのだ。

(小熊英二「戦後補償が問い直すもの」『沖縄タイムス』2000年8月7日朝刊)

もちろん、本土/沖縄、マジョリティー/マイノリティといった二項対立を越えることは極めて重要である。自分の「マジョリティー」という立場にこだわるあまりに、マジョリティー/マイノリティという二分法に基づいて「マイノリティ」という認識の枠組みを再生



産してしまったり、「マイノリティ」を自分と切り離された存在としてとらえないように注意するべきだ。「マイノリティ」のなかにも「マジョリティ」はいるし、逆に「マジョリティ」のなかにも「マイノリティ」がいることも忘れてはならない。また、本土の人々だけでなく沖縄に住まう人たちも「沖縄イメージ」を消費するようになっており、「本土」と「沖縄」という固定化された境界線を前提にした地理認識では、そこにはらまれる問題の複雑さを捉えることはできない。(岩淵, 2004: 17)

ここで引用した2つの文章は、ほぼ同じことを言っている。小熊英二と岩淵功一は、“マイノリティ”の多様性と“マジョリティ”の多様性の双方を指摘し、単なる二項対立図式では問題の複雑さを捉えることができないと論ずる<sup>12</sup>。また岩淵は、二項対立図式が新たに「マイノリティ」という他者を再生産する危険性を指摘している。もちろん、たとえば、日本人／沖縄人、日本人／在日コリアン、男性／女性、健常者／障害者、といったように、それぞれが一枚岩的な集団が存在しているわけではないだろう。そこには多様な価値観をもった人々がいて、差別を平気で実践する人もいれば、差別に反対している人もいるだろう。当然のことである。しかし、そういう個人的な思想や心情や能力とは関係なく、強引に支配／被支配の関係性のなかに投げ込まれてしまうのが差別や植民地主義であり、差別や植民地主義が犯罪的で恐ろしいのはこの点ではなかったか。それゆえに、個人のあり方と、その個人が現在いる場所を区分して、「アイデンティティ」と「ポジショナリティ」とに問題を呼び分けているのではなかったか。

徐京植は「従軍慰安婦問題」の議論のなかで、「日本人としての責任」に対する強い拒絶感が多くの日本人にあり、それは責任そのものを拒絶する心性と、日本人として括られることへの拒絶感の2つに整理が可能で、この2つは補い合っていると指摘する(徐, 2002: 94)。私も“マジョリ

ティ”や“マイノリティ”なるものが構築されたものであることはよく理解できるし、そこに分類される人々の内的多様性も実感している。しかし、本質主義的に“マジョリティ”や“マイノリティ”が存在しないことと、現に“マジョリティ”と“マイノリティ”として区分された支配・権力関係が存在することとは、別の問題である。本質主義的な二項対立を否定することと、現に存在する二項対立的権力・支配関係を否定することは異なるのだ。この点は何度でも強調しておく必要がある。二項対立は、現に存在しているのだ。それはいうまでもなく、抑圧者である“マジョリティ”が作りあげた対立である。今後二項対立を再生産しないことを強調することには意味があるとしても、同程度には眼前にある二項対立を認めることを強調しなくては、単なる二項対立の存在否定になってしまうだろう。二項対立を超えようとするということと、二項対立に無頓着なことは別である。

以前より「二項対立を超えて」という議論に覚えていた違和感は、そのような議論が二項対立を温存するのではないかという疑問による。二項対立を否定する文脈では、“マジョリティ”や“マイノリティ”の多様性が強調される。しかしそういった多様性が強調されればされるほど、“マイノリティの苦しみ”や“マジョリティの差別性”は、多様性のなかの一要素として埋没してゆく(池田, 2003b: 41-43; 2005b: 69)。多様性の文脈において新たに語られる“元マイノリティ”は、差別の被害者ではなく、明るく逞しく生を謳歌する主体としてたち現れる。多様性の文脈において新たに語られる“元マジョリティ”は、差別の実践者ではなく、被抑圧者の理解者としてたち現れる。“マジョリティ”、“マイノリティ”とされる人々の多様性を指摘するのはよい。実際に多様なものだから。しかし問題は、そのような多様性の指摘が何のために行われるのかという点が問われていないことである。

性差別の場合、果たして男性という集団が、その集団意思にしたがって全体として性差別

を強制する言説を形成しているとみるべきなのであろうか。言説という点からみれば、男性の中にも少数ではあるが J. S. ミルのように性差別の言説に反対した人物もいる。また女性の中にも性差別の言説の普及に加担した人がいることは前に述べたとおりである。

—中略—

このような（社会的な関係によって成り立っている）場合には、無理に強制力行使の主体と強制される者とを、実態的に集団として確定することが、かえって有害な結果を招くことになる。たとえば性差別は男性集団が女性集団に対して行使した強制力の結果であると両者の境界線を確定すれば、男性はすべて性差別の敵となり、女性はすべて味方ということになる。これでは性差別の言説普及に加担する女性を批判することも出来なくなる。

（石田，1994：239，（ ）内は筆者による補足）

この石田雄による文章は、他稿においても引用したことがあるが、二項対立を否定する言説の典型であるため、あえて再度引用した<sup>13</sup>。二項対立を否定することは、“美しい自分”を守ることもある。「男性の中で性差別に反対する人物」は、ミルだけではなく石田自身をも想定していることは間違いないだろう。石田は「男性の中で性差別に反対する者（=自分）」を、性差別的な「男性集団」に括られることを拒否し、そこから切り離すことを要求しているのだ。そこでは、性差別的な“汚い男たち”から縁を切った「男性の中で性差別に反対する人物（=私）」という“美しい第三者”が立ち現れている<sup>14</sup>。

二項対立を否定する議論においては、しばしば第三者（第三項）の重要性が強調されるが、このような第三者とは、抑圧者でありながら（差別や抑圧による利益を享受することを続けながら）、自らの責任を問われない位置に逃げ込むことを宣言する存在である<sup>15</sup>。いわば、差別や抑圧から栄養を摂取する身体はしっかりと維持しながら、精神だけがその差別・抑圧関係を、高みから眺めて

いるという、幽体離脱。想像力を奪われ主体性に無頓着な“おぼけ”にふさわしい言説なのだ。他方で、“マイノリティ”には幽体離脱など不可能だ。彼ら／彼女らは、いやでも肉体から逃れられない（実際においても、比喩的な意味においても）。優雅に幽体離脱などできるのは、ポジヨリナリティと責任を問われてこなかった“マジョリティ”にのみ可能な芸当なのだ。

このようなポジヨナリティにこだわった議論には、反論があるだろう。その一つは二項対立を強調することによる“マジョリティ”／“マイノリティ”というカテゴリーの固定化への危惧である。たとえば伊藤守は、1995年の沖縄での米海兵隊員による少女輪姦事件の報道において、キャスター（文脈から推測すると日本人である）が、「沖縄県民は怒っています」とコメントしたことに對して違和感を表明している。すなわち、その怒りを「沖縄県民」の怒りと表現することで他者化し、「語るべき対象」としての「沖縄」と「語る主体」としての「私たち=本土に住むわれわれ」という切斷性を無自覚に前提にし、その境界を強化しているとの指摘である。そのうえで、「怒り」は、「わたし」や「本土に住む人びと」にもあるのに、「このような語りは、テレビを見る者を沖縄にかかわることのない外部に立つものとして、たんなる沖縄をまなざす主体としてのみ構成するようなメディアの力が渦巻いているのではないか」と論じる（伊藤，2004：22-23）。

とくにメディア論的観点に立った場合、このような伊藤の危惧はわからないでもない。しかしこの危惧は、すべて日本人（本土に住むわれわれ）の問題であり、沖縄人の問題ではない。「沖縄県民は怒っています」というコメントを見聞した程度で、テレビを見ている日本人が「沖縄にかかわることのない外部に立つものとして、たんなる沖縄をまなざす主体としてのみ構成」される可能性があるとするなら、それは日本人の支配への無自覚さの問題であって、二項対立の問題や情報の伝わり方の問題ではない。また伊藤は「怒り」は、「わたし」や「本土に住む人びと」にもあるのに」というが、その怒りは、はたして同じ内容で

あろうか。沖縄人が怒るのは、歴史的に繰り返されてきた自身に向けられた暴力への怒りであり、その対象はアメリカと、アメリカの横暴を受諾してそのツケを沖縄人に払わせてきた日本人に対してである。一方で伊藤をはじめとするわれわれ日本人が怒るのは、米兵の非人道性にその共犯者として加担させられている状況であり、怒りの矛先はこの状況を解決できない自分の非力さであるはずだ。もし伊藤が沖縄人と同じように怒っていたのであれば、それは怒りの越境、怒りの篡奪である（もちろん伊藤はそのようには書いていないが）。しかし、この怒りの種別に無頓着であることは、「マジョリティ」の特権であるように思える。怒りが発せられるポジションと怒りの内容は異なっているにもかかわらず、その違いをあえて不問に付すのであれば、問題とされるべきは、伊藤が問題とするのとは正反対の意味での「切断性への無自覚さ」であり、求められるのはむしろその「境界への自覚の強化」ではないだろうか。

また多田治は、自身が沖縄にかかわる過程において、ポジショナリティの問題に意識的であると記述する。彼は「なぜ本土のあなたが沖縄を研究するのか。」「本土の人に、沖縄のことがわかるのか。」と問いかけられてきたという。そのうえで、研究者が「沖縄／本土」という二項対立図式を乗り越えるのは容易なことではないという。そこには知のコロニアリズムの視線が入り込み、「研究主体による、研究対象の搾取」がおこる危険性があるからだという（多田，2004：67）。

この指摘はそのとおりであると思う。だが問題はここ先だ。「そういう批判を恐れて、無難なテーマを選んでおけばよいのだろうか。ポジショナリティの問題を自覚しながら、また呼び起こす批判の痛みも引き受けながら、自分の立場からわかったことを明らかにし、新たな議論に道を開いていくこと」が重要というのだ（多田，2004：67）。多田が経験してきたような“問いかけ”は、沖縄を研究する日本人に対して今までにも数え切れないほど投げかけられてきた。また二項対立的な現実がある以上、それを乗り越えるのは容易どころか、その図式が解決されないかぎり原理的に

も不可能である。この意味で、この多田の見解は不誠実であると思う。なぜなら、なんのために「新たな議論に道を開く」ことが重要なのか、述べていないからである。過去に、沖縄へ（沖縄にかぎらず）多くの日本人研究者が赴き、コロニアルな視点で沖縄人を搾取してきたのは多田の指摘の通りである。しかし、多田がそういった過去のコロニアリストとどう異なっているのかは不明である。沖縄人たちが「なぜ本土のあなたが沖縄を研究するのか」と多田に対して問いかけたのは、そのような過去の事例を多く経験しているからである（もちろん私も問いかけられた）。研究の目的が沖縄人に対する支配の強化であったことも数え切れないほど経験しているからだ。さらには多田の「無難なテーマ」という言葉にもひっかかりを覚える。なににとって「無難」なのか。「無難」や「無難でない」という発想は、どの立場から出てきたものなのか。そこでは対象の資源化という視点は払拭されているのか？

しかし、これらの問いかけに多田は応えないまま新たな議論を求め、という。それでは、意地の悪い見方をすれば「（無難ではない論争的な）テーマを選び、ポジショナリティの問題を自覚しつつ黙殺し、また呼び起こす批判の痛みもたいしたことはなく（対象に批判されても一橋大学教員という職を失うわけではないのだ）、（沖縄人に対して明示されていない）自分の立場から（あくまでも自分にとって）わかったことを明らかにし、（自分の利益にとって）新たな議論に道を開いて」ゆこうとしている、と解釈されても仕方がないだろう。これは曲解かもしれない。しかし、なんのために、どの立場から沖縄を研究するのか、明示しないかぎりは、二項対立を超えることなど、絶対にできない<sup>16</sup>。

二項対立を否定することは、意図的であれ、無意識であれ、差別者を差別の当事者として主体化することから回避する効果をもたらす。徐京植は、自分の属している集団と他者との関係ゆえに、他者から名指しされ、その名指しに対する応答責任を通じて形成される主体性の意義を指摘する（徐，2002：65）。そして二項対立を否定し、

いかなる意味においてもナショナルな文脈に回収されることを拒否し、結果的に応答責任をも回避しかねない文脈をもちだす抑圧者を“空虚な主体”と呼ぶ(徐, 2002: 87; 273)。“マジョリティ”にまわりつく“おぼけ”のような感覚と言動は、この空虚さからひきおこされるものであると思う。

二項対立は、二項対立を分析対象として考えないかぎりは解決しない。その対立を作り出しているのは抑圧者本人だからである。二項的な対立が問題となっているのに、多様性をもちだしてきても二項的な対立は解決されずに残るばかりか、多様性の海に埋没して二項的な権力関係が不可視化される危険性すらある。二項対立そのものを対象とする議論を退けることは、二項対立的な現状を否認することと同じ効果をもたらす。重要なことは、二項対立的な現状を認めることと、二項対立を脱するために二項対立をみつめてその解決を図ろうとする議論(しかも多様性に依拠するものではなく)は両立するというのを認めることである。

## 5. おぼけへの愛?

とはいえ、差別者が二項対立的な図式と向き合うことによって、暴力的となる場面が存在することも確かである。もともと暴力的な存在なのだから当然ではある。そのような暴力は、しばしば“マイノリティ”の側からの二項対立の否認という形で告発される。

岩淵功一は、2003年に行われた「カルチュラル・タイフーン」という企画で、日本人大学生によってなされた、沖縄が表象として消費される過程の研究報告において、“マイノリティ”と名指された沖縄人大学生たちから「私はマイノリティなのか?」、「私がマイノリティならば、あなたは誰なのか?」といった問いが発せられたことを報告している(岩淵, 2004: 15-16)<sup>17</sup>。

たしかに、差別をなくしたい、不平等をなくしたいという意思に基づく研究であっても、その過程で被差別者から「私は被差別者なのか?」、「私

はマイノリティなのか?」という反問が寄せられることは、しばしばあることだ。誰だって自分が“マイノリティ”や“被差別者”といわれれば不快である。この不快感には2つの局面が存在すると思われる。一つは、“マイノリティ”、“被差別者”とされれば、自分が無力な存在だと思われ、あるいは馬鹿にされたと感じるかもしれない。または勇気を挫かれ、無力感に襲われるかもしれない。あるいは郭基煥が指摘するように、自分を“マイノリティ”や被差別者と認めてしまうと、今後“マイノリティ”であるがゆえにふりかかる不利益に耐えなくてはいけないという気持ちが起こるからかもしれない(郭, 2006: 43)。そのような事態への自己防衛(それは当然な反応でもある)として反問がなされることは十分にありうる。もう一つの不快感、自分を“マイノリティ”、“被差別者”として名指しする権力への違和感であろう。自分が何者であるかを名の権利を、先取りされて奪われたと感じるのである。ここでは、他者を名づけることに対する無頓着さへの違和感が表明されていると受け取るべきだ。

このような事態は、しばしば出会いがしらに起こりやすい。すなわち、なんのためにその対象を考えるのかを、対象となる相手に十分に伝えていない場合である。二項対立的な支配状況があり、それを解消するために、一旦は二項対立の存在を認めるところからはじめなくてはならないことが相手にきちんと伝われば、このような反問は撤回され、共に考える姿勢が共有されうる可能性がある。自分が権力を解除するために、今までどのようにして“マイノリティ”を作り出してきたのかを考えていることを伝えれば、相手も共に考えてくれるかもしれない(それしか“マジョリティ”には伝えられることはないのだから)。逆に、なんのためにその対象を考えるのかを伝えないかぎりは、このような反問はいつまでも繰り返す突きつけられるだろう。

もう一つのまったく別の種類の“マイノリティ”による二項対立の否定は、よりやっかいである。それは「私は差別・支配されていない」という“マイノリティ”による被差別・被支配の否

定である。支配者に依存せざるをえないから、その支配者を擁護するというパターンである<sup>18</sup>。

ある集まりで、男性による女性支配について話したところ、その場にいた年輩女性（既婚者）から「あまり男性を攻撃しないでほしい」といわれたことがある。また、ある差別問題にかかわっている支援組織のあり方が、被差別者を資源化し、再支配していると批判したところ、その支援組織のメンバーではなく、支援されている“被差別者”から、そういった批判はやめてほしい、といわれたことがある。その“被差別者”からは、彼ら（支援組織）は、よくしてくれている。彼らは応援団なのだ。もしあなたが彼らを批判し、彼らが支援をやめてしまったらどう責任を取るのか、とも言われた。

これらの言葉を聞いたときには、さすがに私もへこんだ。男性（夫）に依存しなければ生きてこられなかった女性にとって、その男性を、あろうことか他の男性が抑圧者として批判することは、彼女の存立基盤を覆しかねないと映ったのかもしれない。こっちの木（男性への依存）に登らなければ生きていけないと思って登ったら、はしごを外されたようなものだろう。また“マジョリティ”の支援組織の援助がなければ生きていけない“マイノリティ”にとっては、その支援者であり応援団である“マジョリティ”が批判され、その支援がなくなれば、生活にかかわる問題となりうる。“マジョリティ”が自らの権力基盤を明らかにすることが二項対立と差別の解消には必要だと考えて、同じく“マジョリティ”によってなされている“支援”に潜む権力の構造を批判することが、結果的に“マイノリティ”に不利益をもたらすかもしれないという現実。この矛盾は、長らく私を悩ませてきた。

しかしあるとき、この話をした沖縄人に言われた言葉によって事態がよく理解できるようになった。その人たち（支援者組織のメンバー）が、その程度の批判によってやめるくらいなら、その支援活動とは最初からその程度のものであり、その支援活動を行っている人たちの問題である、と指摘されたのである。たしかに、組織的な支援がで

きるといことは、強者の証である。私に明日からなんらかの問題についての支援活動を組織せよといわれても、すぐには難しいだろう。強者の権力は批判されなければならない。実際、支援活動をやめられたら生きていけないという状況にまで“マイノリティ”を支配しているのだから。応援をやめられたら困るまでに“マイノリティ”の力を奪っているのだから。夫に依存しなければ生きていけないまでに女性を追い込んでいるのは、その夫自身なのだから。

このような状況で必要なのは、強者の支配を否定し、二項対立を否定することではない。必要なことは、そこまでに追い詰められていることを怒りに変え、エンパワーメントする方策を、同じく権力を行使する側の人間として考えることである。しかし、結果的にこのような試みは、支援者同士の覇権争いという文脈に回収されやすいのも事実である。その危険性だけは最後まで残るだろう。それを避けるためには、支配者同士の対話の回路を作ることが必要であるが、残念ながら、そのような回路はいまだ準備されていないのが現状である。

## 6. おばけ家族からファシズムへ

ところで徐京植は、先に紹介したような“空虚な主体”は容易に“危険な主体”へとひきずられると述べている（徐，2002：48）。“危険な主体”とは、積極的にナショナルな主体性を発揮しようとする“マジョリティ”の心性であり、主体の不在状況がその不在を埋めるべく安易な解決としてナショナルな文脈に回収される様相を問題化した指摘である<sup>19</sup>。徐は、応答責任を果たそうとしない“空虚な主体”ではなく、天皇を頂点とする家族国家的な“危険な主体”でもない「別の日本」の価値観を作るべきだと論じる（徐，2002：54）。たしかにこの指摘には、近年の日本社会の状況に鑑みて一定の説得力がある。近年、日本人の保守化が顕著であるといわれるが、その背景として“マジョリティ”の主体性の喪失が存在している可能性は充分にありうる。しかしそのような

主体性の転換は、言論活動（たとえば論壇といった場）におけるような明示的なものではないだろう。ここでは、より静かで、より広く日本人に進行している主体性の転換について、ドラマ『北の国から』よりそのモデル像を探ってみたい。それはフィクションではあっても、ここ20年ほどの間に起こった、主体のあり方の一つの変化として、また高視聴率を記録した影響力のある番組として、様々なヒントを与えてくれるだろう。

現在20代後半以上の人で、ドラマ『北の国から』シリーズを一度も観たことのない人は少ないだろう。それどころか、黒板家ほど日本人がその詳細をよく知っている家族もない。『北の国から』は1981年10月にシリーズドラマとして登場し人気を博した（第1シリーズ：全24話：フジテレビ系列）。そのち数年ごとに計8編の続編が作られ、スタッフの高齢化等を理由に2002年の『2002遺言』を最後にシリーズを終えた、21年間にわたって放映された超弩級の人気ドラマである。このドラマをきっかけとして北海道ブーム、富良野ブームまで起き、現在でもレンタルビデオ店では回転率の高い優良商品だという。続編では、時節の話題—たとえば環境問題やターミナル・ケア、有機農法、インターネットなど—の話題も取り込まれ、時代を反映した作りとなっている。いうまでもなく、文学（映像作品を含む）はその時々時代の背景や出来事を解説し、フィクションとして再構成することを通じて、国民のライフモデルを提示してきた。この意味で『北の国から』シリーズも、時節の話題への解釈モデルを提示し続けてきたといえるだろう。

物語は、東京で妻令子（いしだあゆみ）に浮気をされ、別居を決意した黒板五郎（田中邦衛）が、郷里の北海道富良野に純（吉岡秀隆）と蛍（中嶋朋子）の2人の子供を伴って帰ってくるころから始まる。五郎の同級生の中畑（地井武男）や清吉おじさん（大滝秀治）、草太（岩城滉一）、涼子先生（原田美枝子）といった大人たちにやさしく囲まれ、純と蛍は幼馴染の正吉（中澤佳仁）らとともに、富良野の大自然の中で成長してゆく、というものである<sup>20</sup>。

この『北の国から』ワールドを作り上げたのは、脚本家の倉本總である。富良野は彼自身の故郷でもあり、彼は後に富良野に「富良野塾」という組織を作り、彼の思想を学ぼうとする若者たちと一種の共同生活をはじめるところで、倉本の脚本にはいくつかの特徴がある。まず、インターネットや有機農法等、時節の話題の扱いがステレオタイプであり、あたかも世のおじさんたちの愚痴を代弁するような語法であることが挙げられる（たとえば、インターネットにかんして否定的な理由が、人と人は顔を合わせないと分かり合えない、といったものである点など）。案外そういった凡庸かつ一般的な視点が『北の国から』の人気を支えてきたのかもしれない<sup>21</sup>。

次に『北の国から』で特徴的なのは、女性の描かれ方である。それは非常にステレオタイプな描かれ方である。典型は別れた妻令子（いしだあゆみ）。彼女は産業社会で働く都会の女として描かれる。彼女には天使（子どもたちへの愛）と悪魔（浮気）が同居している。この極端な女性の性格づけは、日本のドラマの伝統芸でもある。それが一つの人格のなかに同居しているという意味では、1981年という時期を考えれば新しかったのかもしれない。一方で五郎の同級生である中畑の妻や、親戚である清吉の妻は、記号的な「妻／母」として描かれる。夫をサポートし子供の成長を見守る存在という記号である<sup>22</sup>。

女性については平面的な描写が目立つ本シリーズであるが、一転して男性の登場人物はリアリティに溢れている。純と正吉の性への目覚め、五郎と中畑と成田（ガッツ石松）の間で交わされる女をめぐる冗談のあれこれ（典型的なホモ・ソーシャルな関係である）。ホモ・ソーシャル性は、五郎と清吉おじさん（大滝秀治）との間ですら、昔五郎が風呂を覗いた話題として共有されている<sup>23</sup>。

このドラマは、一般に家族のドラマとして受け取られており、実際に家族を軸にして物語が展開しているが、それにしては奇妙な点もある。まず、ドラマの冒頭で妻と別居した五郎が富良野に帰郷してくる点は重要だ。このドラマにおいて

は、最初から家族（近代血縁家族）は失われている。『北の国から』以前にも、有名な家族ドラマとしては山田太一脚本の『岸辺のアルバム』（1977年：東京放送）等があるが、たとえば『岸辺のアルバム』では家族が実質的には崩壊していても、形式的には依然として家族であり、多摩川氾濫によって家屋が流されたことを契機に、家族の再結合の可能性が示唆されていた。しかし『北の国から』では、最初から近代血縁家族は形式としても、実質としても失われていて、それが回復することは、最後までなかった<sup>24</sup>。

さらに「家族の失敗」は世代を超えて受け継がれる。続編における蛍の不倫（『'95秘密』）、純の妊娠騒動（『'92巣立ち』）など、どうやっても家族の成功にはつながらないエピソードばかりが続く。蛍は不倫相手の子供を宿したまま幼馴染の正吉と結婚するが、正吉は行方不明になってしまう。最後に正吉から手紙が来て希望が差すものの、最終的に家族の成功の場面は描かれず、この夫婦については不安を残したままの幕切れとなる（『2002遺言』）。最終話となる『2002遺言』において純も結（内田有紀）との結婚を決意するが、最終的に家族形成が成功したかどうかは（その後結婚したのかどうかも含めて）不明のままドラマは終わる<sup>25</sup>。『北の国から』は、久しぶりに五郎の家に泊まりにきた子供たちと五郎が、家族の幻影を惜しむかのようにして終わる<sup>26</sup>。

倉本總の大きな美点は、いかに突拍子もない話でも、あるいはいかに空想的な話でも、家族というテーマにかぎっていえば（あくまでも家族にかぎるが）、現実社会とのリアリティを最後まで保ったことである。女性描写や時節のトピックの扱いにおいてはステレオタイプな倉本の脚本も、こと家族にかんしてのみは驚くほど一貫した視点を持ち続けている。現代において家族は失敗している、という位置からこのドラマが発射していることは、おそらく多くの人の共感を呼んだ。もし夫婦子供揃っての一家移住であったならば、このドラマはここまで成功しなかったと思われる（それでは『大草原の小さな家』だ）。そして繰り返される家族再生へ向けての様々な試行錯誤。しか

しそれらは、必ず、すべて、しかも無残に、失敗する（典型は家屋の焼失：『'84夏』）。安易な「家族の成功」はリアルではない。すでに近代血縁家族の「物語」は崩壊してしまっていて、再生することは妄想であってもありえない。と倉本が認識していた点は、このドラマを大きく特徴付けている。この世相把握能力の高さと、おそらく倉本自身は家族を再生させたかったであろうにもかかわらず、ドラマの水準を維持するためにリアリティを優先させた職業倫理の高さこそ、『北の国から』を他の凡庸なドラマから抜きん出た存在にしている源泉である。

しかし倉本のような保守的な思想の持ち主が、しかもこれだけの筆力がありながら家族を再生することを放棄するだろうか。じつは『北の国から』には、もうひとつの家族が準備されていた。それは「麓郷」であり「富良野」という拡大家族（＝共同体）であった。このドラマの真の主役は「ロクゴウ」であり「フラノ」である（現実社会の麓郷や富良野と区別するために、ここではカタカナで表現する）。このドラマにおいて光り輝いているのは、近代家族ではなく共同体であった。「富良野ブーム」が起こったことも頷ける。

黒板家は、自業自得とはいえ思わず笑ってしまうほどのトラブル続きで、どうみても「家族失格」である。しかし、黒板家を優しく包み込む家族のような共同体「ロクゴウ・フラノ」がそこにはあった。中畑や清吉おじさんをはじめとする優しい人々。心を癒す自然。フラノは、五郎や純や蛍を包み込む家族、しかも絶対に彼らを裏切らない絶大な包容力をもった存在として描かれる。倉本が彼のシンパ・追随者と共に、後に「富良野塾」を開設して一種の共同生活を始めたのは暗示的である。

また、『北の国から』においては産業社会が外部として設定されていることも特徴的である。黒板一家は、家族制度からの“落ちこぼれ”であると同時に、産業社会からの脱落者でもあった。このドラマを貫くもう一つのコンセプトとして、産業対自然、という対立軸が持ち込まれている。いうまでもなく五郎は自然の体現者であり、産業社

会へのアンチテーゼとして描かれる（廃棄物で家を作るなど）。また第1シリーズにおいて、純によるナレーションが「恵子ちゃんへ」という、東京（産業社会）に“残って”いる同級生への呼びかけの形をとっていることも、産業社会を外部化する効果を与えてきたといえるだろう。

東京に残っている妻令子を含めて、産業社会とその価値観は徹底的に否定される。黒板家には、二重の意味での転換が準備されている。ひとつは、産業社会から自然へという転換。これは東京から富良野へという地理的な転換を経て表現されている。もうひとつは、近代血縁家族から家族的共同体への転換。これは黒板家から家族的な共同体“フラノ”への転換となって表現される。妻令子（子どもたちにとっては母）の病死（第22話）は、もはや黒板家の成員は血縁家族には戻れないという宣告であり、家族と人のつながりが根本的に転換してゆくことの象徴でもあった。

そして『北の国から』で表現される主体性は、産業社会において「人間性を喪失した人びと」が大自然のなかで共同体に解放されるというものである。言い換えれば、高度経済成長によって豊かにはなったものの、人生の価値を見失い、人生への自信が揺らいだ日本人が、その心の空洞を埋めるべく、ナショナルな共同体へ同一化し、主体性を溶解させてゆく物語でもある。このような主体性の転換は、徐京植が指摘するような、社会の成員であるにもかかわらずその社会とのつながりを実感せず、ナショナルな責任を引き受けようとしない“空虚な主体”が、価値観をナショナリズムに同一化させることによって、ネーション（より大きな国家的な文脈）に回収されるという“危険な主体”への変貌の過程と、並行的に軌を一にしている。

倉本は産業社会の価値観とその基盤である近代血縁家族に絶望し、その欠落を埋めるべく、より強固でより拡大されたナショナルな主体性を描き、家族の後継を共同体に求めたとも解釈できる。このドラマが『北の家から』でもなく、『北の大地から』でもなく、『北の街から』でもなく、『北の“国”から』というタイトルであったこと

は、偶然ではない。

そのことは、このドラマの中で途中退場となった登場人物をみるとよくわかる。最初の退場者は幼馴染である正吉の祖父笠松杵次（大友柳太郎）であった。彼は地域共同体の価値観を共有せず、強烈に自己の利益を主張する「ハグレ者」であった。いずれは“地域家族フラノ”と決定的な対立を迎えることは必至であった。そしてまさに決定的な対立の場面で、彼は泥酔したために水死するという形でフラノから排除されてゆく（第15話）。

次は涼子先生（原田美枝子）。彼女はセクシーな独身女性であり、自立志向が極めて強い主体的な女性である（このドラマに登場する女性の中では異色の存在でもあった）。彼女は結婚によってネットワーク化されているフラノを支える大家族システムに明らかにそぐわない存在であった。このままでは、彼女を中心にフラノのセクシュアリティの秩序は混乱し、彼女の主体性が“地域家族フラノ”と齟齬をきたすことは必至であった。ゆえに彼女は宇宙人にアブダクション（誘拐）されてしまう（第20話）。同じく独身女性であっても、最終的に結婚という選択を行う雪子（竹下景子）が、やがてドラマの中で背景化され排除されなかったこととは対照的である。

そして北村草太（岩城洗一）。彼は長らく純の兄貴代わりで、まさに“地域家族フラノ”の重要構成メンバーであった。しかし彼は経済効率を優先するあまり、農家仲間の完次を追放する（『'98時代』<sup>27</sup>）。これはフラノという拡大された家族共同体が表象する母性への叛乱であった。また彼は正吉に蛍と結婚するように命じた。ちなみにこの結婚ほど近代血縁家族へのアンチテーゼとなっているものはない。なぜなら蛍はそのとき不倫相手の子を宿していたのだから。草太はフラノ共同体の秩序を守るために、正吉に結婚を命じた。そして、あたかも共同体の王の命令としてその理不尽な命令は実行されるが、そのような絶対的な主体には、その直後に事故死という退場が準備されていた（『'98時代』）。その後草太は“地域家族フラノ”の象徴的存在として記憶が共有されてゆくこ



ととなる。

このドラマでは、拡大された“地域家族共同体フラノ”との価値観と齟齬をきたす者は一貫して排除されている。このドラマは単純で、同時に複雑な構成をもっている。近代血縁家族の失敗という、優れて同時代的な場所から出発しつつも、その向かう先が大家族としての共同体フラノという、近代家族よりも達成困難なユートピアなのである。フラノは現実の富良野とは似ても似つかないはずだが、倉本はその矛盾した世界観を、同一のゆるぎない筆致で一貫して描いてゆく。なぜそのような矛盾を解消しようとしなかったのか。

この疑問は、より大きな家族の物語、すなわち「家族国家」という存在を念頭におくことによって解決する<sup>28</sup>。このドラマが、昭和天皇の死という出来事を跨いで続いていたことは象徴的だ。1935年生まれの倉本は、天皇を中心とした家族国家観を子供時代に教え込まれて育ったはずである。不幸なことに、それを相対化するはずの大人になったときには世の中は戦後となっており、家族国家観は世間から薄れてゆく。本当にかつて天皇中心の家族国家が存在したのかどうか、実感として確かめることすら成人した彼には不可能であったはずである。そして、やがて来たる新天皇のもとでは（それはシリーズ中に現実となる）、巨大な家族国家の可能性は望めないことを、鋭敏な倉本は世の多くの人に先んじて感じ取っていたのではないだろうか。

また、このドラマにおいて近代血縁家族が産業社会の匂いと深く関連付けられている点も重要である。それは、人間性の喪失、苦しみ（妻の浮気にまつわるあれこれ）を与える場、魂が落ち着くことのない場として描かれる。一方で、そのように漂流する精神が解放され、居所を与えられるのは家族国家という巨大な場であった<sup>29</sup>。そして『北の国から』がバブル期を挟んでいること、また中国残留日本人孤児の帰国事業が第1シーズンの放映開始と同じく1981年にはじまっていることにも注意が必要である。

バブル期に向かって経済が爛熟し、国家や家族からアイデンティティが乖離し、消費によってア

イデンティティが逆照射されるような時代。そのような状況の下で、自身の存在への空虚さは多くの人々によって共有されていた。その空虚さと拠り所のなさを、“自然”と“共同体”へと回収する文脈が『北の国から』には満ちていた。また家族の不毛さが顕在化し、個人の思想や心情が消費によって浸食され、“空虚な主体”が一般化するなかで、時を同じくして登場した「日本人」というつながりを意識せざるをえない残留孤児たちの登場。そのような環境下で、新たな拡大家族、共同体へと人びとの主体性は“解放”された。“空虚さ”を抱える不安定で主体性を欠いた“おばけの家族”（＝“マジョリティ”による近代血縁家族）は、より大きくナショナルなファシズムに回帰することによって安定をえたのだ。“空虚さ”による不安定さを埋め合わせるナショナルな文脈への主体性の回収は、一種の“癒し”としてすら機能した。徐が指摘する“空虚な主体”から“危険な主体”への転換の素地は、たとえば『北の国から』のようなメディア・コンテンツにおいて、家族というタームを経て準備されていたとは考えられないだろうか。

もちろん世の中には、『北の国から』において製作者側がエンコーディングしたこれらのメッセージをそのまま受け取るような、ヘゲモニックなデコーディングを行う視聴者ばかりではなかっただろう。むしろ、主演の田中邦衛のユニークな表情の変化を楽しんだり、純の「ダメっぶり」を楽しむといった、折衷的、対抗的なデコーディングが多かったように思われる。しかしながら、ガブナーの「培養効果分析」が示すように、メディアから長期間かつ繰り返し受け取るメッセージは、受け手に無意識ともいえる意識の変革をもたらす可能性がある。また、そのような実社会に対するドラマのメディア効果は横におくとしても、『北の国から』に登場する一群のキャラクターは、結果的にこの20年間の日本人の主体性の転換をよく示すモデルであるといえよう。

シリーズ最終回の『2002遺言』においては、もはやかつてのように“家族共同体フラノ”の価値観を脅かすような“異分子”は存在していない。

そこではナショナルな拡大家族の居心地のよさが、ある種のノスタルジーとして提示され、その心地よさが視聴者にも共有されることへの強い確信の下に制作が行われているように感じられる。そして主人公の五郎は、徐々に“共同体フラノ”の体现者のごとき存在となってゆく。彼はますます無口になり、自然との合一感、慈悲深さの表象として描かれる。彼は最後に子供たちに向けて遺言を書こうと試みるが、その試みはうまくいかない。書くことがないのだ。最後に示される遺言は、フラノ・ロクゴウの情景を語り、謙虚さを説いて終わる。

ここにいたって、五郎を表象とする“主体”は、共同体に融解してしまっている。その遺言はあまりにも空虚である。パトリオティズム（愛郷主義）以外に伝えることがないのだ。空虚なおばけの家族は、“空虚さ”を維持したまま、“空虚で危険なファシズム”へと回収される<sup>30</sup>。“フラノ”が“日本”に拡大されるには、ほんの狭い溝を越えるだけの手間しかかからないだろう。徐が応答責任主体の問題として指摘した主体性の問題の、ネガがここには存在する。

## 7. 結語

本稿では、植民地主義における主体の問題を考察するにあたり、事前に考えておかなければならない周辺の諸問題を整理した。第1の問題は、“おばけ”と表現した“マジョリティ”の無根拠性と当事者意識の低さの問題である。それは想像力の欠如と深く関連している。第2は、被抑圧者を抑圧者同士の政治的資源と化してしまう危険性。第3は、二項対立を否定することが、抑圧者の責任を曖昧にしてしまう危険性。第4は、他者を名指す主体がはらむ問題点。最後に、主体の“空虚さ”（おばけ性）が、ナショナルな文脈に回収される危険性であった。これらの問題に共通しているのは、被抑圧者から投げかけられる間に応える応答責任性も含めて、責任の主体を考える際に、いかにその主体性への自覚が欠落し、その欠落が新たな支配を容易にするかという問題であ

る。

本稿で考えたこの問題意識を基盤として、次の課題としては、応答が可能で、かつナショナルな文脈に回収されない、“別の主体性”（それは徐京植が指摘する“別の日本”と対応するものだろう）の可能性を探ることが挙げられる。植民地主義の構造を、とくに支配者に対して見えにくくしているのは、このような自らの主体性にかんする認識が語られてこなかったことが大きな要因であると考えられるからだ。

<sup>1</sup> 現代社会においては、“マジョリティ”と“マイノリティ”の境界は相対的かつ個別の関係性において問われなくてはならないため、ここでは“マジョリティ”という用語を、個別の抑圧・権力関係においてその領域を変化させる相対的かつ幅の広い概念として使用する。

<sup>2</sup> 植民地主義と情報経路、想像力の関係については、拙稿（池田，2005b）を参照されたい。

<sup>3</sup> ただ一点だけ疑問を呈しておきたいのは、暴力の行使が可能なる者とは強者であるとの上野の認識は妥当であると思うものの、対抗暴力すら振るえない者（潜在的にという意味も含めて）の思想を強者にどうやって受け入れさせるかという問題が未解決である。強者は弱者を他者化し、非人格化することによって支配を可能としているのだから、弱者が強者に対してどのように対等性の要求に耳を傾けさせるか、という点が不明確な印象を受けた。

<sup>4</sup> 上野は女性にとっての市民権は差別者（男性）に似ることではないとして、男性と同じ程度に愚行を行う権利（愚行権）を否定する立場に立つ。この論点は非常に重要なものなので、本稿ではこれ以上深入りせず他稿で改めて論じる予定であるが、愚行権と対等性についての議論は、拙稿（池田，2005b：80-87）において平等と慣用という視点から部分的に論じてあるので参照されたい。

<sup>5</sup> 単なる原状回復に留まらない、歴史性を帯びた対等な関係をめぐる政治については、拙稿（池田，2005b：80-84）に詳しいので参照してほしい。

い。

<sup>6</sup> ちなみに、マルコム X の著作や発言集を丁寧に読むならば、彼は積極的に対抗暴力を勧めていたのではなく、白人の不正義は必然的・論理的に対抗暴力を呼び起こすであろうということを、冷静かつ公正に述べていたにすぎないことがわかるだろう。その態度は公平であり、白人に対する「更生のチャンス」を確保する必要性すら説いているにもかかわらず、白人たちはマルコム X が対抗暴力の可能性を示唆しただけで彼に「暴力的」というレッテルを貼り、黙殺しようとしてきた。この心理は被抑圧者が明示的に対抗暴力を否定しないかぎり、抑圧者はそれを恐れて弾圧を強める過程に対応しているだろう。この対抗的な力の黙殺の政治については、拙稿（池田，2005b：86-87）を参照されたい。

<sup>7</sup> 上野の『生き延びるための思想』（上野，2006）という書籍自体、そのような暴力以外の「対抗力」の可能性を探ることを主旨としていられると思われる。また念のため付記しておく、私は対抗暴力をただちに否定しているのではない。ここではあくまでも対抗暴力以外の対抗力の可能性を想像できなかった自分を問題としたいのである。

<sup>8</sup> 被差別者を差別者同士の政治において差別者が資源化する危険性と、差別者間において編成される政治については、島袋まりあ（島袋，2002）、拙稿（池田，2003a：34-35）、ならびに拙稿「沖縄への欲望」（野村浩也編『ポストコロニアリズム』松籟社（近刊）収録予定）を参照されたい。

<sup>9</sup> もちろん、だからといって反差別を訴えないほうがよいと言いたいわけではない。“マジョリティ”は反差別を訴えることすら政治的資源にできること、そのような政治に回収される危険性を自覚すべきであることを主張しているのである。

<sup>10</sup> これは、いわゆる「差別されるほうにも原因がある」という差別の言説として典型的に現れる。詳しくは、野村（2003）を参照。

<sup>11</sup> 拙稿（池田，2003a；2003b；2005b）など。

<sup>12</sup> なかでも小熊英二の見解は少しおかしい。二項図式で日本人が「責任を感じて恥じ入るか、同

情するしかない。さもなければ「自分には関係ない」として議論を避け」るのは、日本人の想像力の欠如と、当事者性に対する自覚の低さによる問題にすぎない。また「右派ポピュリズムの温床とな」ってしまうのも、それらの議論の枠組みを自由に日本人が設定できる力を持っているからである。この点を問わずして、二項対立図式の問題とするのは、いささか論点のすり替えではないかと思われる（ただし、この小熊の文章は新聞紙上で署名記事であり、小熊の意図が正確に反映されていない可能性もあるため、批判ではなく疑念にとどめておきたい）。

<sup>13</sup> この石田の文章における政治性、とくにジェンダーの文脈における二項対立否定論の政治的な効果については、拙稿（池田，2003a：20-22）に詳しいので、参照されたい。

<sup>14</sup> もちろん、その対蹠者として「性差別の言説普及に加担する女性」なる存在も同時に作り出されてゆく。このような存在は被抑圧者でありながら差別に加担する“汚い存在”として描かれ、差別者側にいながら差別に反対する“美しい私”を一段と輝かせることとなる。のみならず、差別の主体性（それはいうまでもなく差別者の側にのみ存在しているはずだが）までも曖昧にする効果をもつ。

<sup>15</sup> 野村浩也も、このような「第三者化」が支配者の権力を隠蔽する効果があることを指摘している（野村，2005：156-158）。

<sup>16</sup> 多田のみを俎上にあげるのでは不公平なので、私自身のこと書いおこう。わたしもかつて多田と同様に沖縄の研究を行っていた。しかし、「沖縄問題」とよばれていることは、そのほとんどが「日本問題」であるとの見解にいたり、この問題は沖縄人や沖縄社会を研究しても解決に至らないと考えるようになった。それ以後、私は研究の対象を沖縄人／沖縄社会から日本人／日本社会に変えた。

<sup>17</sup> なお、私はその場になかったので詳細はわからないため、あくまでもその企画をまとめた書籍『沖縄に立ちすくむ』（岩淵・多田・田仲，2004）を契機として、一般論を述べたい。

<sup>18</sup> このバリエーションとして、いわゆるモデル・マイノリティ（支配者の利益に自らの利益を重ね合わせて生きるマイノリティ）による差別や支配の否定もありうる。このようなモデル・マイノリティによる共犯化をめぐる問題は、本稿で準備しつつある主体の議論とは若干論点がずれるため割愛し、別稿に譲りたい。モデル・マイノリティにかんする問題については、拙稿（池田，2003a：22-24）ならびに野村（2005：71；202-203）を参照されたい。

<sup>19</sup> この徐の議論は、加藤典洋の『敗戦後論』（加藤，1997）における歴史的主体のあり方に対する批判という文脈で提起されたものである。この一連の「歴史主体（／認識）論争」については、比較的入手しやすいものとして、高橋（1999）、高橋編（2002）徐（2002）、上野（2006）などを参照するとよいだろう。

<sup>20</sup> 『北の国から』のシナリオはすべて公刊されているが、実際の放送と異なる点も多いため、本稿での内容はすべて実際に放送された番組を基準に論を進めたい。なお、本稿において（第〇話）と記す場合は、第1シリーズを指す。

<sup>21</sup> また、倉本の（このドラマの）保守性は細部において繰り返し登場する。たとえば、富良野の「へそ祭り」恒例の空知川川下り大会（第18話）で、参加した五郎らのグループのイカダの名前は、なんと「返せ北方領土！号」である。五郎はみてくれに似合わず極右思想の持ち主で、政治的にはタカ派でもあったのだ（もっとも「返せ北方領土！号」はレースの途中で沈没してしまうのだが）。

<sup>22</sup> 倉本が描く女性のなかで、私がもっとも印象深く感じた存在は涼子先生（原田美枝子）である。母性と暗い過去を兼ね備えた彼女は、同時に純の最初の性的対象で「フェロモンぷんぷんのふしぎちゃん」でもある。倉本の女性への憧憬と嫌悪と恐怖が一身に詰まったようなキャラクターである。彼女は最終的にドラマから浮いてしまい、なんとUFOに連れ去られてしまう（第20話：じつは転勤だったということが20年後に明らかになる）。ここまで女の謎と魔性とセクシュアリティ

を背負わされたキャラクターが教師であるという点に、倉本のマニア性（？）と鬱屈したリビドーを読み取るべきだろう。この表象は、倉本にとって女性とは理解不能な宇宙人であることを示している（よって宇宙人によるアブダクションという退場方式になったのかもしれない）。このタイプのキャラクターは、後に元AV女優で純の彼女のシュウ（宮沢りえ）に受け継がれる（『'95秘密』）。倉本におけるセクシュアリティを考えることは、世の中高年男性のセクシュアリティの一つの典型を考えることにつながるかもしれない。

<sup>23</sup> さらにいえば、本シリーズでは差別問題が黙殺されている。膨大な人物が登場する『北の国から』であるが、明確にアイヌ民族とわかる登場人物は一人も存在しない。かろうじて風貌や野生動物への知識の深さからアイヌではないかと推測できる人物（クマさん：南雲佑介）が登場しているものの（この表象もオリエンタリズムであるが）、彼がアイヌであるかどうかは最後まで明示されない。富良野から鉄道で1時間ほどの旭川には北海道でも最大規模のコタン（アイヌ民族の集住地域）があり、かつ黒板家は極貧なのだから、彼らの周囲にアイヌがまったく存在しないことは、沖縄を舞台としたNHKの連続テレビ小説『ちゅらさん』の世界に米軍基地が存在しないことと同じくらいリアリティを欠いている。

<sup>24</sup> 別れた妻の妹雪子（竹下景子）が同居して疑似家族のような時期もあったり、別れた妻が訪ねてきたりもするが、近代血縁家族が回復されることはなかった（そもそも別れた妻は離婚手続きのために弁護士を伴って来たのだった）。

<sup>25</sup> 純を演じた吉岡秀隆と結を演じた内田有紀が、このドラマの撮影後に実生活において結婚したため誤解している人もいるようだが、ドラマ内では結婚の場面は描かれていない。

<sup>26</sup> 正確にはラストシーンではないが、ラスト間際のシーンである。

<sup>27</sup> ちなみに草太には、かつて恋人だったつらら（松田美由紀）を自らの浮気を理由にフラノから追い出してしまったという前科（=イエローカード）があった（第12話）。2枚目はレッドカード

ということなのかもしれない。

<sup>28</sup> 家族国家（家族国家観）については、牟田（1996）、西川（2000）、上野（1994）に詳しい。

<sup>29</sup> しかし倉本ほどの熱意と筆力をもってしても、たとえフィクションであっても、同時代的な巨大な家族国家の復権は無理であった。復権できたのはせいぜいフラノという共同体家族というレベル。しかも非現実的なユートピアとして。倉本は『北の国から』の後、富良野塾等の活動で近代家族を超える家族像を模索しながらも、その一方で『祇園囃子』『川いつか海へ』『優しい時間』などの以後の作品で、ナショナルな文脈における歴史性へと、さらに歴史的な家族国家の系譜へと重心を移してゆく。この軌跡は、かつて三島由紀夫がたどった道を、家族というフィールドで再構成しているかのようである。

<sup>30</sup> その意味では、“空虚な主体”も“危険な主体”も、その空虚さという次元においては同じである可能性がある。

#### 参考文献一覧

- Anderson, Benedict 1983/1991 *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, (白石さや・白石隆訳1997『増補 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』NTT出版)
- Baldwin, James 1961/1963 *Nobody Knows My Name/The Fire Next Time*, (黒川欣映訳1968『次は火だ—ボールドウィン評論集』弘文堂新社)
- S. カーマイケル (Carmichael, Stokly) 他, 大田竜編訳1968『アメリカの黒い蜂起』三一書房
- Fanon, Frantz 1951 *Peau Noire, Masques Blanc*, (海老坂武・加藤晴久訳1998『黒い皮膚・白い仮面』みすず書房)
- Fanon, Frantz 1959 *La Sociologie D'Une Révolution*, (宮ヶ谷徳三・花輪莞爾・海老坂武訳1969『革命の社会学』みすず書房)
- Fanon, Frantz 1966 *Les Damnés de la Terre*, (鈴木道彦・浦野衣子訳1996『地に呪われた者』みすず書房)
- Guevara, Ernest. Che 1956 *La Guerra de Guerrillas*, (五十間忠行訳『ゲリラ戦争—キューバ革命軍の戦略・戦術』中央公論新社)
- Hage, Ghassan 1998 *White Nation: Fantasies of White Supremacy in a Multicultural Society*, (保莉実・塩原良和訳2003『ホワイト・ネーション—ネオ・ナショナリズム批判』平凡社)
- 池田 緑 2003a 「男性言説をめぐるポリティックス」『社会情報学研究（大妻女子大学紀要—社会情報系—）』12：17—38
- 池田 緑 2003b 「「沖縄問題」の言説構造と日本人の位置性」『社会情報学研究（大妻女子大学紀要—社会情報系—）』12：39—57
- 池田 緑 2004a 「女子大学に勤務する男性教員の政治的位置性」『社会情報学研究（大妻女子大学紀要—社会情報系—）』13：25—41
- 池田 緑 2004b 「“男女共同参画”とその社会的言説—産業社会と寛容さをめぐって—」『社会情報学研究（大妻女子大学紀要—社会情報系—）』13：9—23
- 池田 緑 2005a 「心的傾向としての植民地主義—植民地主義をめぐる基礎的考察Ⅰ—」『社会情報学研究（大妻女子大学紀要—社会情報系—）』14：55—77
- 池田 緑 2005b 「平等，寛容，想像力，そして植民地主義—植民地主義をめぐる基礎的考察Ⅱ—」『社会情報学研究（大妻女子大学紀要—社会情報系—）』14：79—99
- 石田 雄 1994 「一政治学者からみたジェンダー研究」原ひろ子・大沢真理・丸山真人・山本泰編『ジェンダー』新世社：226—245
- 伊藤 守 2004 「沖縄へ、沖縄から／沖縄へ—ポストコロニアルとメディア研究」岩淵功一・多田治・田仲康博編『沖縄に立ちすくむ—大学を越えて深化する知』せりか書房：20—26
- 岩淵 功一 2004 「沖縄に立ちすくむ—本書プロジェクトの経緯と問題関心」岩淵功一・多田治・田仲康博編『沖縄に立ちすくむ—大学を越えて深化する知』せりか書房：6—19

- 岩淵功一・多田治・田仲康博編 2004『沖縄に立ちすくむ—大学を越えて深化する知』せりか書房
- 鄭 映恵 2003『<民が代>斉唱—アイデンティティ・国民国家・ジェンダー』岩波書店
- 郭 基煥 2006『差別と抵抗の現象学—在日朝鮮人の<経験>を基点に』新泉社
- 加藤 典洋 1997『敗戦後論』講談社
- 加藤 典洋 1999『可能性としての戦後以後』岩波書店
- Memmi, Albert 1968 *L'homme Dominé*, (白井成雄・菊池昌実訳1971『差別の構造』合同出版)
- Memmi, Albert 1982 *La Racisme*, (菊池昌実・白井成雄訳1996『人種差別』法政大学出版局)
- 牟田 和恵 1996『戦略としての家族—近代日本の国民国家形成と女性』新曜社
- Newton, Huey. P 1973 *Revolutionary Suicide*, (石田真津子訳1975『白いアメリカよ、聞け—ヒューイ・ニュートン自伝』サイマル出版会)
- 西川 祐子 2000『近代国家と家族モデル』吉川弘文館
- 野村 浩也 2003「差別理論」中根光敏+野村浩也+河口和也+狩谷あゆみ『社会学に正解はない』松籟社：131-161
- 野村 浩也 2005『無意識の植民地主義—日本人の米軍基地と沖縄人』御茶の水書房
- 岡 真理 2000a『彼女の「正しい」名前とは何か—第三世界フェミニズムの思想』青土社
- 岡 真理 2000b『記憶／物語』岩波書店
- Said, Edward. W 1978 *Orientalism*, (板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳1993『オリエンタリズム』平凡社(上・下))
- 千田 有紀 2005「アイデンティティとポジショナリティ」上野千鶴子編『脱アイデンティティ』勁草書房：267-287
- 島袋 まりあ 2002「『沖縄』を語る過程を思考することの意義」『部落解放』507：19-27
- 徐 京植 2002『半難民の位置から—戦後責任論争と在日朝鮮人』影書房
- Spivak, Gayatri. C 1988 *Can the Subaltern Speak?*, (上村忠男訳『サバルタンは語ることができるか』みすず書房)
- 高橋 哲哉 1999『戦後責任論』講談社
- 高橋哲哉編 2002『<歴史認識>論争』作品社
- 上野 千鶴子 1994『近代家族の成立と終焉』岩波書店
- 上野 千鶴子 2006『生き延びるための思想—ジェンダー平等の罨』岩波書店
- 鶴飼 哲 1997『抵抗への招待』みすず書房
- X, Malcolm 1965 *The Autobiography of Malcolm X*, (浜本武雄訳1993『マルコム X 自伝』アップリンク)
- X, Malcolm (Edited by Breitman, George) 1965 *Malcolm X Speaks: Selected Speeches and Statements*, (長田衛訳1968『黒人は武装する』三一書房)
- X, Malcolm (Edited by Breitman, George) 1970 *Speeches, Interviews and a Letter by Malcolm X*, (長田衛訳1993『いかなる手段をとろうとも(第2版)』現代書館)
- Young, Robert. C 2003 *Postcolonialism: A Very Short Introduction*, (本橋哲也訳『ポストコロニアリズム』岩波書店)

## 映像資料

- 『北の国から Vol.1-12』ポニーキャニオン
- 『北の国から '83冬』ポニーキャニオン
- 『北の国から '84夏』ポニーキャニオン
- 『北の国から '87初恋』ポニーキャニオン
- 『北の国から '89帰郷』ポニーキャニオン
- 『北の国から '92巣立ち』ポニーキャニオン
- 『北の国から '95秘密』ポニーキャニオン
- 『北の国から '98時代』ポニーキャニオン
- 『北の国から2002遺言』ポニーキャニオン

## Can Ghosts Rebirth?

### : Basic Consideration to Colonialism. Part 3

IKEDA MIDORI

*School of Social Information Studies, Otsuma Women's University*

#### Abstract

In analysis of colonialism, the most important element is “the subject”. The people called “majority” often lacks a consciousness to “subject”. This lack makes them possible to become a “majority” at the same time. There also is such a “majority” as “the empty subject” refusing reply responsibility. They are just like “ghosts” mentally. This omission of subjectivity is caused by lack of imagination. “Majority” also is the existence that has robbed someone of imagination.

Such “majorities” are maintained by concealing binary opposition between dominators and dominated people in power relations. It makes existing power relations uncertain among the both that variety of dominator and variety of dominated people are emphasized. Rule relations are maintained as a result of this. To deconstruct rule relations, more than anything, binary opposition must intend for analyze.

In addition, “the empty subject” may easily transform it to “the dangerous subject” by identify themselves as nation and community. We can think about such a transformation through subjectivity of the characters which change from a member of a modern family into one of community via patriotism in popular TV drama such as “Kita-no-kuni-kara”.

To regard relations between subjectivity and colonialism, we must assume omissions of imagination and a reply responsibility. This point is important to consider the possibility of the new reply subject who is not “empty”, nor “dangerous”.

#### Key Words (キーワード)

colonialism (植民地主義), subject (主体), reply responsibility (応答責任), majority (マジョリティ), minority (マイノリティ), counter power (対抗力), binary opposition (二項対立), fascism (ファシズム), positionality (ポジショナリティ), TV drama “Kita-no-kuni-kara”(テレビドラマ『北の国から』)